図説日本の古典

第1巻／**古事記**	武蔵大学教授 神田秀夫	奈良国立文化財研究所長 坪井清足	学習院大学教授 黛　弘道	
第2巻／**萬葉集**	筑波大学教授 伊藤　博	成城大学教授 上原　和	学習院大学教授 黛　弘道	
第3巻／**日本霊異記**	琉球大学教授 小島瓔禮	奈良国立博物館 上原昭一	東京大学助教授 笹山晴生	
第4巻／**古今集・新古今集**	東京大学助教授 久保田　淳	美術史家 白畑よし	聖心女子大学教授 目崎徳衛	
第5巻／**竹取物語・伊勢物語**	大阪女子大学教授 片桐洋一	大谷女子大学教授 伊藤敏子	聖心女子大学教授 目崎徳衛	
第6巻／**蜻蛉日記・枕草子**	明治大学教授 木村正中	美術史家 白畑よし	東京大学教授 土田直鎮	
第7巻／**源氏物語**	東京大学教授 秋山　虔	学習院大学教授 秋山光和	東京大学教授 土田直鎮	
第8巻／**今昔物語**	早稲田大学教授 国東文麿	美術史家 梅津次郎	京都女子大学教授 村井康彦	
第9巻／**平家物語**	神戸大学名誉教授 永積安明	大阪大学教授 武田恒夫	京都大学教授 上横手雅敬	
第10巻／**方丈記・徒然草**	お茶の水女子大学助教授 三木紀人	東京国立文化財研究所 宮　次男	東京大学助教授 益田　宗	
第11巻／**太平記**	早稲田大学教授 梶原正昭	東京国立文化財研究所 宮　次男	京都大学教授 上横手雅敬	
第12巻／**能・狂言**	東京大学教授 小山弘志	京都国立博物館 切畑　健	大阪市立大学教授 原田伴彦	
第13巻／**御伽草子**	国文学研究資料館長 市古貞次	東京国立博物館 高崎富士彦	東北大学名誉教授 豊田　武	
第14巻／**芭蕉・蕪村**	福岡大学教授 白石悌三	文化庁 佐々木丞平	学習院大学長 児玉幸多	
第15巻／**井原西鶴**	埼玉大学教授 長谷川　強	東京大学教授 山根有三	学習院大学長 児玉幸多	
第16巻／**近松門左衛門**	学習院大学教授 諏訪春雄	大阪大学助教授 信多純一	横浜市立大学教授 辻　達也	
第17巻／**上田秋成**	国文学研究資料館教授 松田　修	東京国立文化財研究所 河野元昭	学習院大学教授 大石慎三郎	
第18巻／**京伝・一九・春水**	早稲田大学教授 神保五弥	名古屋大学助教授 小林　忠	立正大学教授 北原　進	
第19巻／**曲亭馬琴**	明治大学教授 水野　稔	国立国会図書館 鈴木重三	東京学芸大学助教授 竹内　誠	
第20巻／**歌舞伎十八番**	早稲田大学教授 郡司正勝	名古屋大学助教授 小林　忠	成城大学教授 西山松之助	

図説 日本の古典4　古今集・新古今集
昭和54年3月20日　第1刷印刷
昭和54年4月9日　第1刷発行
著者代表——久保田淳　©1979
発行者——堀内末男
発行所——株式会社 集英社
東京都千代田区一ツ橋2-5-10
電話—販売部　東京(03)238—2781
出版部　東京(03)230—6351
振替—15653／郵便番号101

印刷所——大日本印刷株式会社
用紙——王子製紙株式会社
製本——中央精版印刷株式会社
文勇堂製本工業株式会社

製本には十分注意していますが，落丁・乱丁の際は
おとりかえいたします。
0391-167004-3041
Printed in Japan

古今和歌集・新古今和歌集

集英社

図説日本の古典—4

〈企画委員〉
東京大学教授　秋山　虔
国文学研究資料館長　市古貞次
学習院大学長　児玉幸多
早稲田大学教授　神保五弥
東京大学教授　山根有三

〈第四巻・編集委員〉
東京大学助教授　久保田淳
美術史家　白畑よし
聖心女子大学教授　目崎徳衛

目次●

●カラー図版●「能宣集上」〈西本願寺本『三十六人家集』〉／「元真集」〈西本願寺本『三十六人家集』〉／姨捨山の月／元永本『古今和歌集』／『山水屏風』／「小野小町」〈佐竹本『三十六歌仙絵』〉／「紀貫之」〈上畳本『三十六歌仙絵』〉／『鶴下絵和歌巻』〈俵屋宗達画・本阿弥光悦筆〉／花白河蒔絵硯箱／住之江蒔絵硯箱／『三十六歌仙図屏風』〈酒井抱一筆〉／三笠山に鹿文様打掛／『後鳥羽院肖像』〈伝藤原信実筆〉／隠岐の後鳥羽院火葬塚／後鳥羽院の宸翰／檜扇／『中殿御会図巻』／「桂女」〈『三十二番職人歌合絵巻』〉／「博打」〈『東北院職人歌合絵巻』〉／「十二月鴛鴦図」「九月鶉図」〈尾形乾山筆『十二か月和歌花鳥図』〉

『古今和歌集』から『新古今和歌集』へ　久保田淳……28
はじめに　三代集の時代　転換期の歌集　乱世の歌集

『古今和歌集』—作品鑑賞　久保田淳……41
『古今和歌集』の古歌　黎明期の歌　六歌仙とその時代　「古今」的表現の諸相　撰者たちとその時代

国風文化の源流—六歌仙と宇多天皇　目崎徳衛……60
『古今和歌集』序の歴史観　六歌仙の人びと　宇多天皇の指導的役割

紀貫之の歌心　小町谷照彦……72
貫之の美意識と和歌の表現類型　貫之の歌論と言語感覚　『古今和歌集』の表現と貫之の役割

屏風絵と歌絵　白畑よし……85
屏風絵・障子絵の発生　やまと絵屏風の影響　歌絵について　歌絵の遺品　歌絵と「あしで」

●図版特集●

和歌にうたわれた自然　久保田淳……97
くもの糸筋／水に散る梅／落花の雪／青苔碧水／はちす葉の露／泡沫有情／螢火乱れ飛んで／かがり火の影／滝の白玉／山の井の水／荒磯・真砂・白波／月を宿す萩／月照湖面／碧流錦葉／木洩れ陽／霜葉の歌／風に露散る／冬ざれの池／尾花の雪／雪折れ竹

『新古今和歌集』—作品鑑賞　久保田淳……108
藤原俊成と西行　王朝季世の歌びと　式子内親王　藤原定家と藤原家隆　慈円と藤原良経
後鳥羽院　才子佳人たち

●図版特集●
歌仙絵と百人一首　白畑よし……137
「素性」「大伴家持」「藤原元真」「小大君」「斎宮女御」〈佐竹本『三十六歌仙絵』〉／「斎宮女御」「源公忠」「藤原敦忠」「源重之」〈上畠本『三十六歌仙絵』〉／「猿丸大夫」〈業兼本『三十六歌仙絵』〉／「伊勢」「平兼盛」〈後鳥羽院本『三十六歌仙絵』〉／「達磨和尚・聖徳太子」〈『釈教三十六歌仙絵』〉／「小野小町・正三位家隆」〈『時代不同歌合絵』〉／「猿丸大夫」「中務」〈岩佐勝以筆『三十六歌仙絵』扁額〉／百人一首歌かるた〈道勝法親王筆〉／百人一首歌かるた／光琳百人一首歌かるた

歌仙絵の世界　白畑よし……150
歌仙と似絵　歌仙絵の成立　歌仙絵の変遷　類似歌仙絵　歌合と百人一首

後鳥羽院の生涯　目崎徳衛……164
運命の人　多力の人　悲劇の人

●図版特集●
隠遁と漂泊の詩人—西行　目崎徳衛……177
『西行法師像』〈伝土佐広周筆〉／徳川本『西行物語絵巻』／旧大原本『西行物語絵巻』／吉野山の桜／吉野の西行庵／朝霧の高野山／円位の書状／束稲山／中将実方の墓／小夜の中山／我拝師山の月／崇徳院の白峯陵／円位筆「一品経和歌懐紙」／終焉の地弘川寺

藤原定家の虚構と現実　久保田淳……184
はじめに　定家の恋と恋の歌　政治の暗雲と妖艶な詩的世界　『正治二年院初度百首』の詠進
「俊成・定家一紙両筆懐紙」の意味

●図版特集●
『三十六人家集』—平安時代の名筆　白畑よし……196
「貫之集上」／「躬恒集」／「赤人集」／「遍昭集」／「素性集」／「猿丸集」／「朝忠集」／「高光集」／「忠岑集」／「重之集」／「信明集」／「忠見集」／「中務集」

百人一首の歌人たち　目崎徳衛……202
百人一首の構成　政治の圧力の下で　女房と遁世者　『小倉百人一首』

『古今和歌集』『新古今和歌集』歌人系図　**高野晴代**……210
『古今和歌集』『新古今和歌集』歌枕地図　**藤田百合子**……211
『古今和歌集』『新古今和歌集』歌年表　**藤田百合子**……212
『古今和歌集』『新古今和歌集』歌人略伝　**高野晴代**……214

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡例

1　古典文学の珠玉の名作を立体的に構成した本シリーズでは、その内容をさらに意義づけるため、その部分の執筆者が各図版の解説にあたったが、それ以外の場合は、とくに解説の末尾に氏名を付記した。

2　本巻の仮名づかいは、原則として現代仮名づかいによった。古文の引用については、歴史的仮名づかいを原則としたが、必要に応じ原本通りとした部分もある。特殊な美術・歴史用語の引用などについては原本通りとした。

3　参考文献を各部分の章末に一括して注記し、読者の便をはかった。

4　各図版に添記した国宝・重文・史跡のうち、重文は重要文化財、史跡は国指定史跡の略である。なお、個人所蔵者名は略させていただいた。

5　本巻の図版写真および資料の収集にあたっては、その所蔵者・管理者・提供者・撮影者など、関係者各位のご好意とご協力を賜った。

〈第四巻・執筆者〉

東京大学助教授――久保田淳

美術史家――白畑よし

聖心女子大学教授――目崎徳衛

東京学芸大学助教授――小町谷照彦

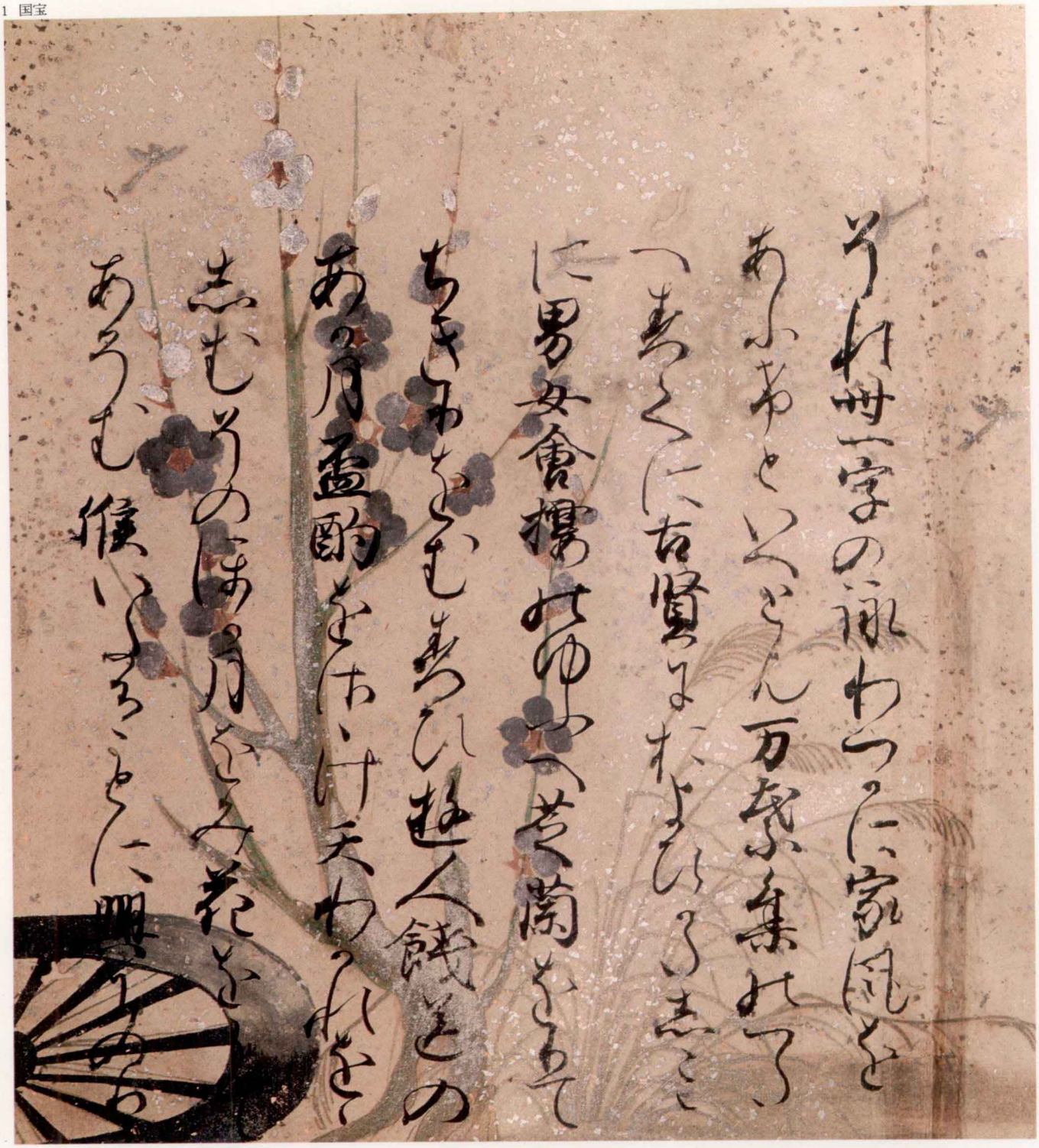
〈装幀〉

後藤市三

〈レイアウト〉

宇喜多邦嘉

樋口英男

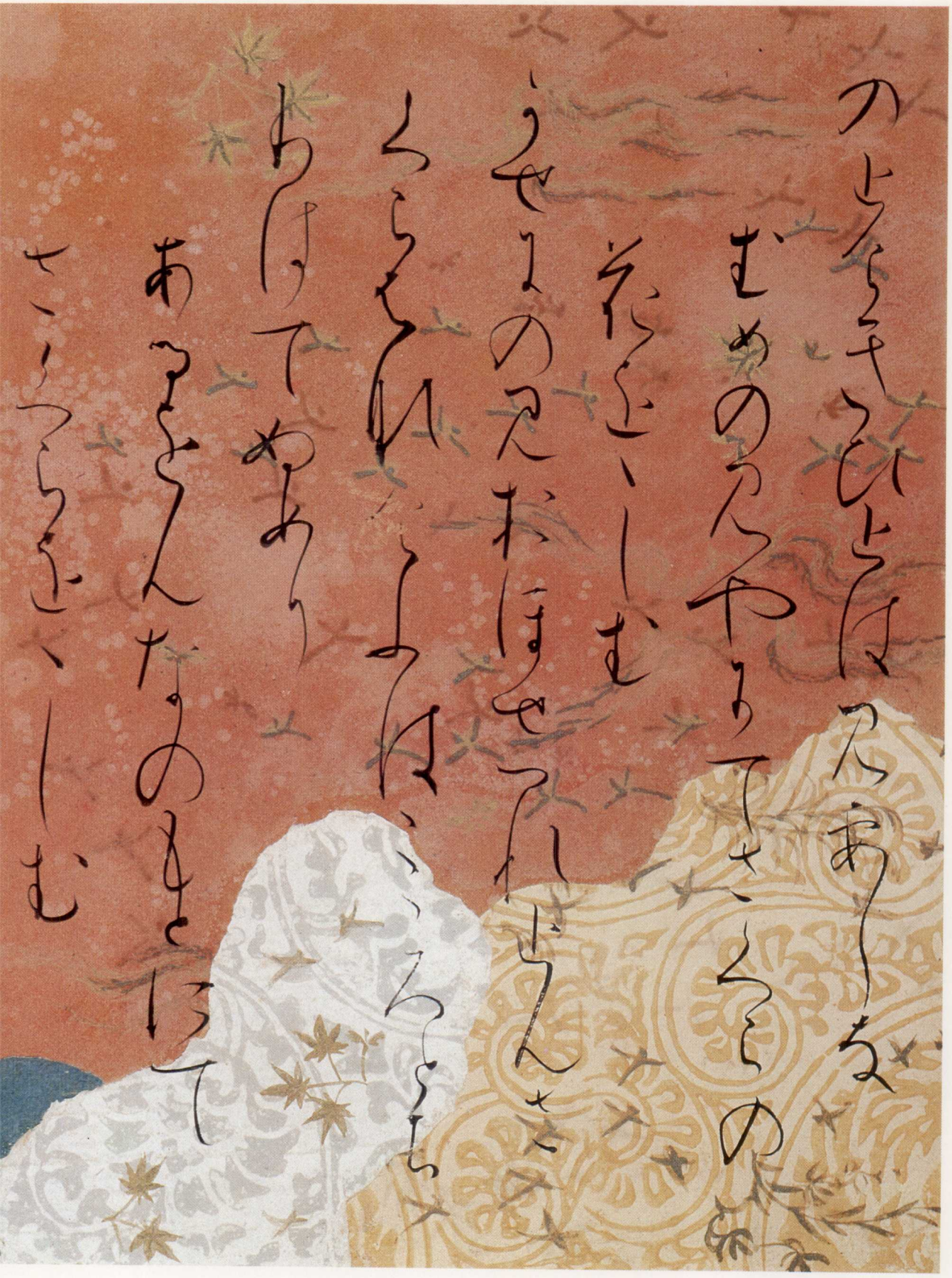


「能宣集上」〈西本願寺本『三十六人家集』〉・釈文

それ冊一字の詠わづかに家風を
あふげといへども万葉集のつた
へすでに古賢におよびがたしこゝ
に男女会接のゆふべ芝蘭をりて
ちぎりをむすび遊人餞送の
あか月盃酌をさゝげてわかれを
しむそのほか月をみ花をもて
あそむ候いたるごとに興にのり
(こゝろざしをいふときにあらず
といふことなし)

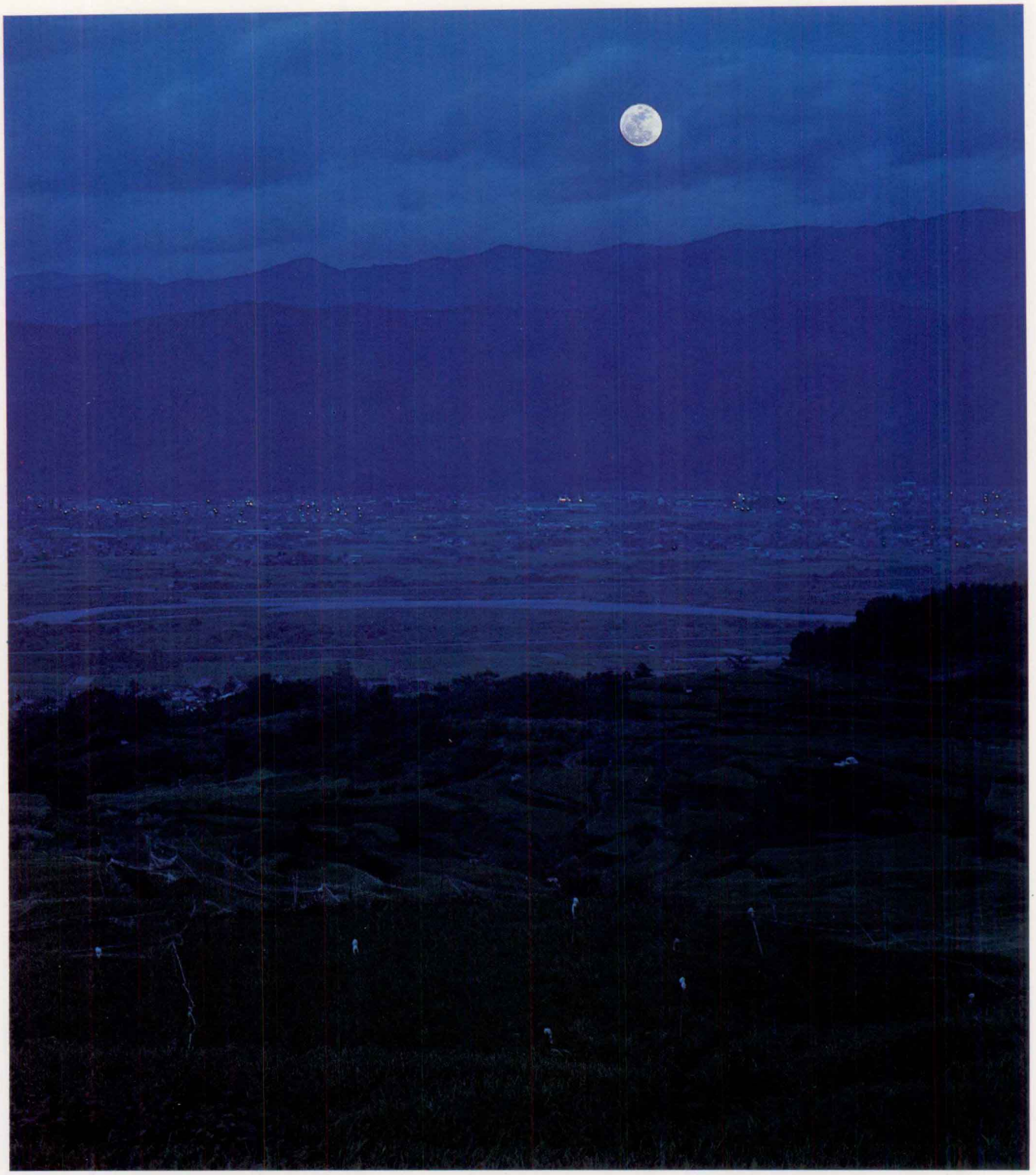
2 「元真集」〈西本願寺本『三十六人家集』〉――平安時代，天永ごろ書写された32帖のうちでも，「元真(もとざね)集」は90枚の料紙に種々の変化の意匠をつくした美しい例である。この1枚は，柳・楓の折枝文様と，飛鳥を散らした赤の染紙を大きく示し，下方には濃青染紙に楓の折枝，蝶・飛鳥の文様のものや，また白地に波，唐草の2種の唐紙，黄地に唐草の文様の唐紙を破継(やぶれつぎ)という曲線に切ったそれぞれの別紙で貼り合わせた料紙である。華麗な色調と，破継による曲線と，大らかな歌文字の構成には，王朝的な幻想美がある。和歌の筆風は比較的老練な趣がみられる。紙本墨書。縦20.1㎝　横15.9㎝／京都府・本願寺(西)

1 「能宣集上」〈西本願寺本『三十六人家集』〉――藤原公任撰による三十六人の家集を，白河法皇ころに書写された冊子32帖のうち，「能宣(よしのぶ)集」は上・下2帖，138枚におよぶもっとも内容の充実したすぐれた例である。ほとんどの料紙は美麗に装飾をつくしたもので，この帖のはじめの見開き(本図)は，秋草・梅・片輪車(かたわぐるま)の下絵のある優美な意匠でうめている。梅のみずみずしい若木に咲く大輪の銀色のゆたかな趣の花と，大らかな片輪車や風にそよぐすすきとのそれぞれがよく調和を得ている。春と秋の風物を同じ画面に描く点は，歌絵の自由な発想にもとづくと思われる。書風は上・下とも，また「家持集」とも同筆で堂々とした風格がある。他の古筆には，元暦校本『万葉集』巻第十九がある。平安時代。紙本墨書。縦17.9㎝　横15.8㎝／京都府・本願寺(西)



「元真集〈西本願寺本『三十六人家集』〉・釈文
（二行目より）

むめのみやにてさくらの
花をゝしむ
かぜにのみおほせつれどもさ
くらばなけふはこゝろとち
りはてぬめり
あるをんなのもとにて
さくらをゝしむ
ひとゝせにひとゝせながらちら
ずともいつかさくらのはなに
あくべき
またおなじ
春風（の）吹たびごとに桜花こゝろ
のどかに見ぬどぞなき（以下略）



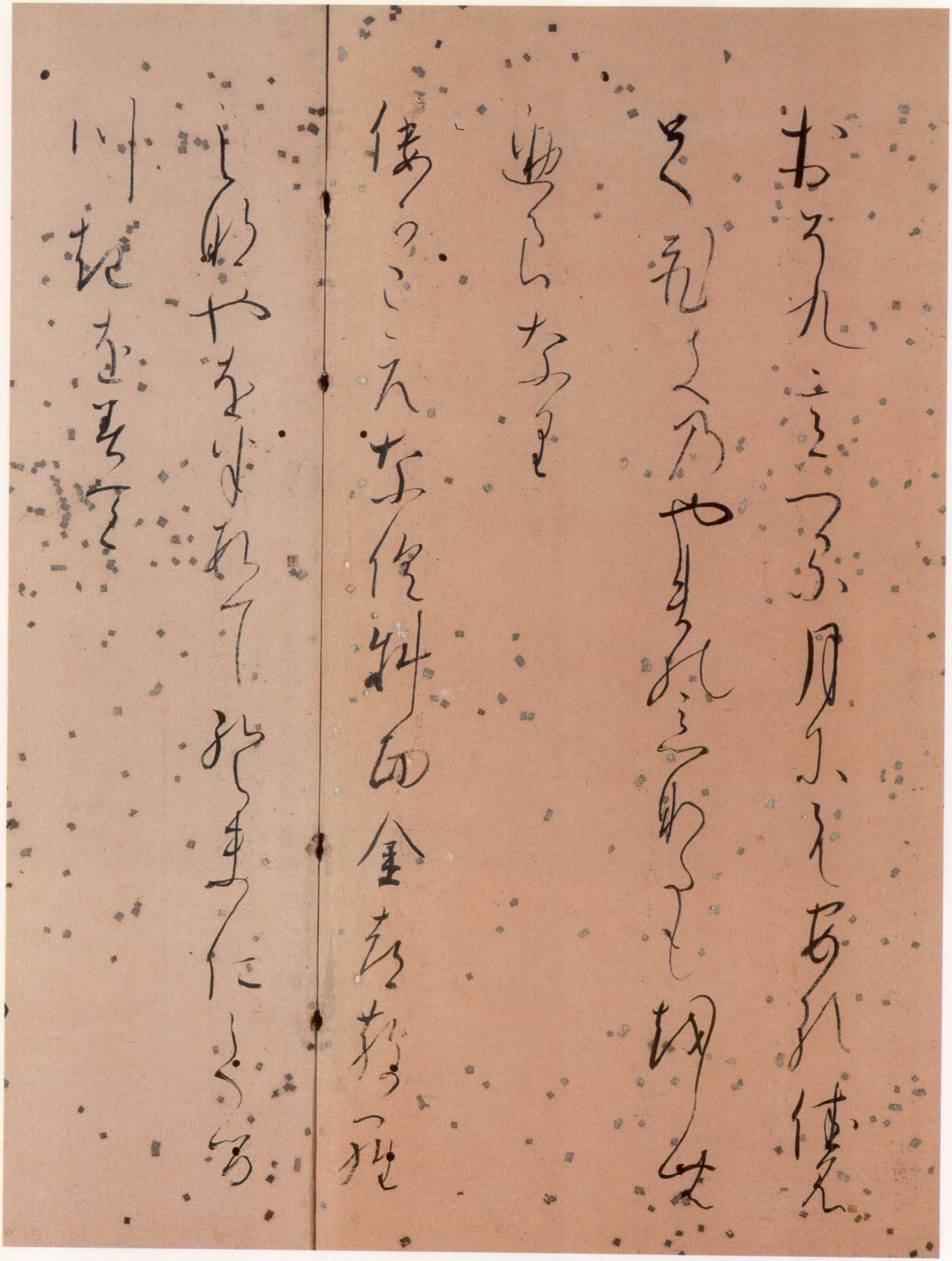
元永本『古今和歌集』巻第十七・釈文

（四行目より）

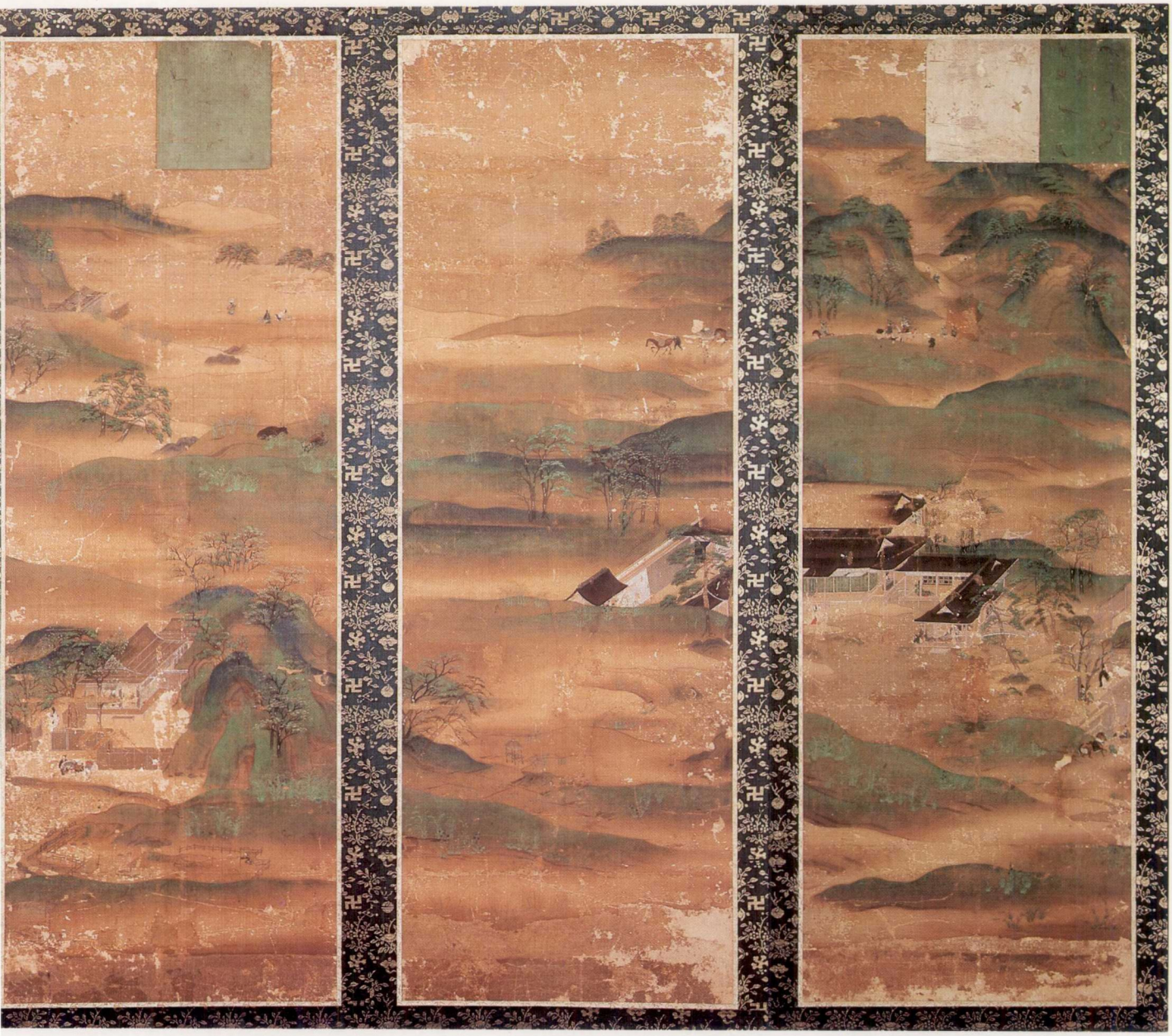
わがこゝろなぐさめかねつさらしなやをばすてやまにてるつきをみて

4　元永本『古今和歌集』巻第十七――元永本は，巻上の末尾に元永3年(1120)7月24日書写の奥書をもつ。『古今和歌集』としては現存最古の完本として知られ，優美な料紙の点でも貴重である。筆者は源俊頼(としより)と伝えられている。平安時代。綴葉装(てつようそう)。縦20.8㎝　横15.2㎝／東京国立博物館

3　姨捨山の月――姨捨(おばすて)山は信濃国(長野県)更級(さらしな)郡にあり，千曲(ちくま)川のうねる善光寺平を一望におさめる景勝である。『古今和歌集』巻第十七に収められた「わが心なぐさめかねつ」(雑上・978)の1首は，詩歌の素材として「花」とならぶ「月」を詠じた名歌として愛唱された。「姨捨山」も屈指の歌枕となり，歌人・俳人のここを訪ねた者は多い。『大和物語』第156段には，親代わりに愛育された老婆を，妻の責めたてるままに山中に捨ててきた更級の男が，悲嘆にたえられずに詠んだ歌として出ている。この説話には，インド・中国の棄老伝説の影響が考えられるが，成立の軸となったのは月光のかきたてる深い哀愁であろうか。

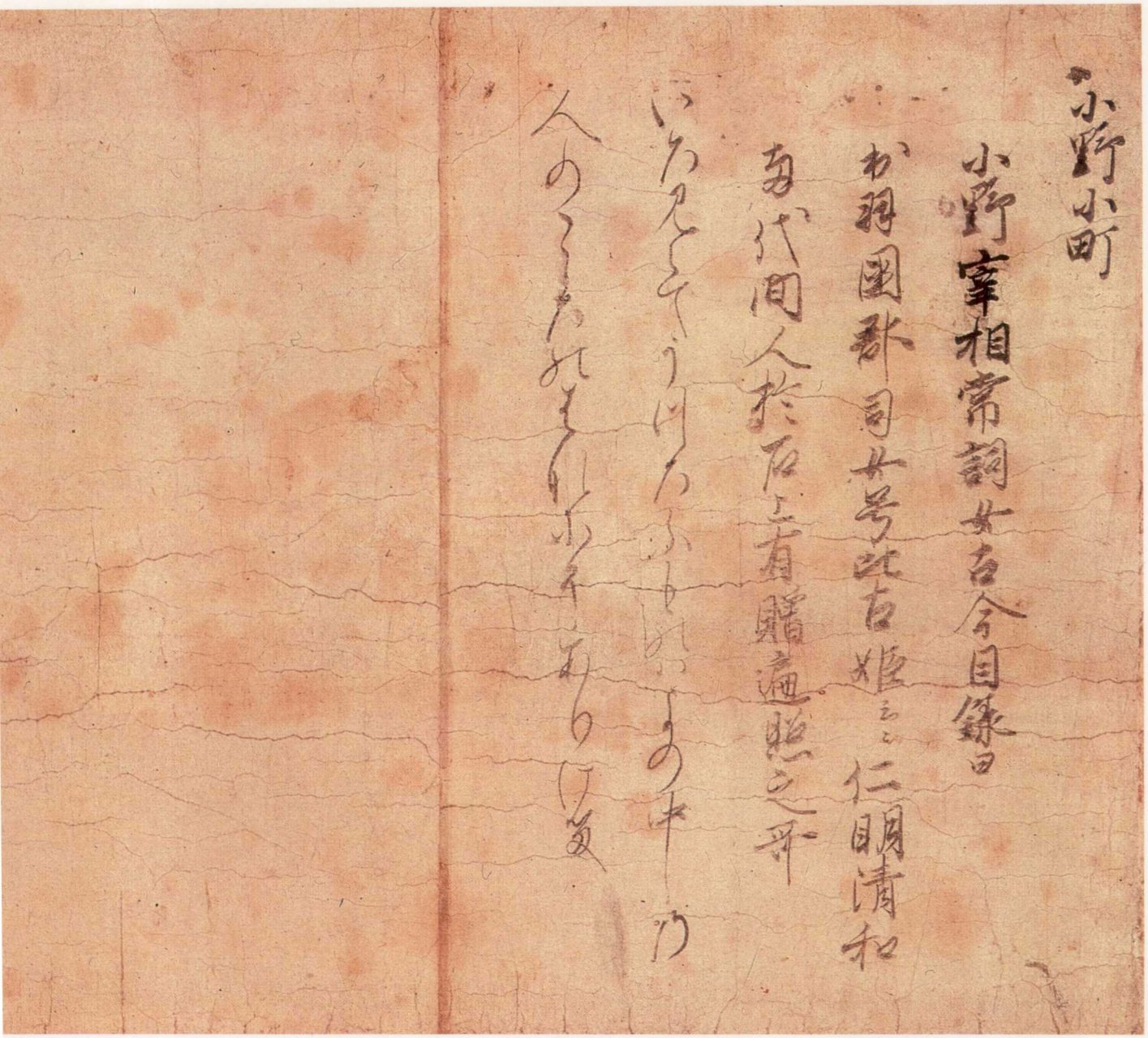


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



5　『山水屏風』――この『山水(せんずい)屏風』は鎌倉時代の制作であるが，前代のやまと絵屏風の様相を伝える唯一の遺品で，当初は四季おのおのを1帖(1隻)に組み合わせたものとされるが，秋の季節の分がいま残っている。6曲の各扇に縁とりした形も古様であるとともに，画面の構図が俯瞰的であるのと，その季節の風趣のあいだに，貴賤男女のさまざまな生活の姿を織り入れているのは，やまと絵屏風のしきたりである。たとえば，秋草の丘に遊ぶ鹿，流れで水浴する庶民の人々，寝殿造の貴族の邸で池の蓮花を賞(め)でる男女など，こまやかに季節と人との結びつきを描いている。原物は各扇の順序が乱れているようなので，図柄から推測して復原した。絹本着色。(各扇)縦110.8cm　横37.5cm／京都府・神護寺

5 国宝



「小野小町」《佐竹本『三十六歌仙絵』》・釈文

小野小町

小野宰相常詞女古今目録曰

出羽國郡司女号比古姫云々 仁明清和

両代間人於石上有贈遍照之哥

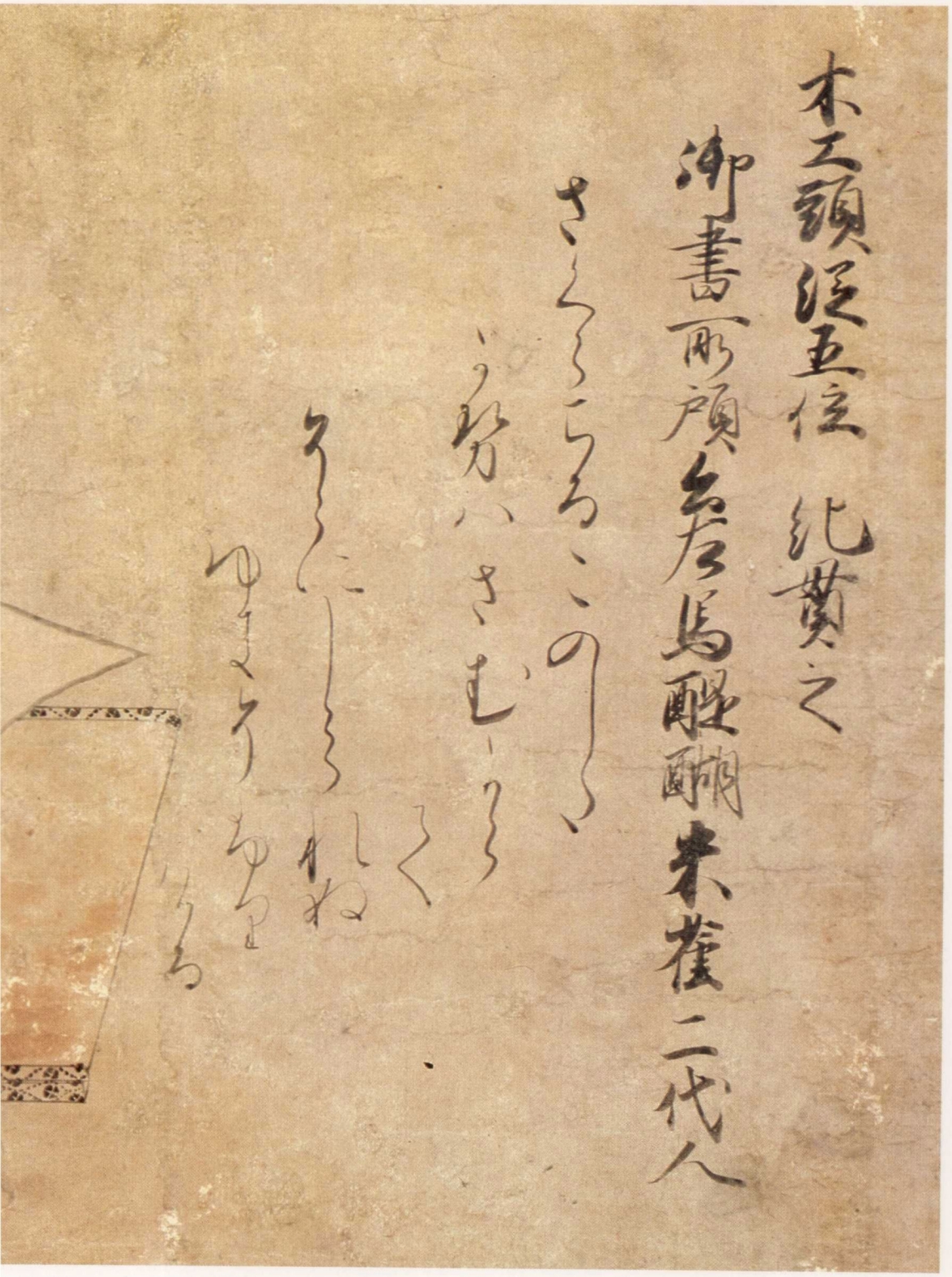
いろみえてうつろふものはよの中の

人のこゝろのはなにぞありける

6 「小野小町」〈佐竹本『三十六歌仙絵』〉――「三十六歌仙」のうちの，5人の女歌仙に含まれるが，もっとも華麗な姿に表現されている。衣裳は唐衣(からぎぬも)の女房の正装であるが，小町の在世時の古様ではなくて，制作期の13世紀の時世粧であることが，その色調や文様などから推定される。大らかに空に舞い立つような流動的な姿態は，うしろ向きに描くことで，よりよく示されるわけである。ことに絶世の美女とうたわれた容貌をかえってあらわさない意図に，この作者のすぐれた才智がうかがえる。鎌倉時代。掛幅装。紙本着色。縦40.0cm・横81.8cm

「紀貫之」〈上畳本
『三十六歌仙絵』〉・釈文

木工頭従五位　紀貫之
御書所預玄左馬醒醐朱雀二代人
さくらちるこのした
かせはさむから
て
そらにしられぬ
ゆきそふり
ける



7 「紀貫之」〈上畳本『三十六歌仙絵』〉── 鎌倉時代，13世紀前半の歌仙絵の流行によって，種々の作品があるが，そのうちの上畳本(あげたたみぼん)である。江戸時代にはすでに一歌仙に切り離されていて，その遺品は少ない。姿態は佐竹本とくらべ，畳の有・無の他はほとんど共通し，また和歌も同様のものなので，両者のあいだには密接な関連があるとされる。筆者もやはり藤原信実と伝える。佐竹本の新時代的な派手やかな動きにくらべて，上畳本はしずかに情緒を内潜させる古風な趣が見受けられる。制作期は佐竹本と大差がないと思われる。この貫之像は冠黒袍の束帯姿で，笏(しゃく)を端然と持つようすに，おかしがたい気品をたたえている。鎌倉時代。掛幅装。紙本着色。縦29.7cm　横50.3cm／東京都・五島美術館

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com